

「言語・文学」参照基準策定のために

1. 分野の定義

「言語・文学」は、専門教育の水準で広かつ多様な学問分野を形成しているが、それと並んで共通教育と教養教育において枢要な位置を占めている。その理由は、「言語・文学」が人間の精神生活と社会生活の根底にあって、あらゆる学問そして文化の生成を可能にする基盤ないし土壌だからである。

人間は言語によって、自己と他者と社会とに関わり、また言語を基本的な道具として認識と行動を実現することができる。専門的な学問として言語について反省的な考察を展開することと並行して言語の運用能力を身に付け、さらにその能力を増進することを目指す実践的な活動（及びそれを可能にする理論的考察）は当該分野の根幹をなす。

言語伝達において、文字は、時と場所を越えて、言語活動の成果を伝えることを可能にしてきた。これによって、人間の表現能力は拡大し、遠隔的なコミュニケーションと知識の蓄積・伝達が可能になった。文字表記された文を読み解き、また書き記す能力を学ぶのが、ことばの最も広いそして根源的な意味における文学あるいはリテラシーである。そして「文武両道」や「文事」という表現に含まれる「文」、あるいは文字を意味する英語の letters が伝統的に人文的教養を意味していたことから窺われるように、リテラシーは教養の土台であり、それを磨くことと教養を身につけることは密接に関連している。より局限された意味での文学、すなわち芸術作品としての文学の読解と創作およびそれについての批判的な考察はもちろん本分野の重要な柱となる学科であるが、それと並んで、読み書きの能力及び教養という二重の意味でのリテラシーの学習と修練が、本分野のもう一つの根幹である。なお、映像や絵像が文字に代わる言語伝達であることもここでは考慮する必要がある。

2. 「言語・文学」に固有の特性

2.1.0 「言語・文学」に固有の視点

「言語・文学」が人間の営みのあらゆる局面に浸透して、その不可欠の構成要素をなしている以上、あらゆる学問は「言語・文学」を通じて自らの活動を展開し、その成果は文書や画像によって表現され、研究・教育・学習の根拠と材料になる。しかし他の学問にとって、「言語・文学」は活動の手段であり、文書や画像は当該学問の遂行にとって必要な材料（情報、知識、ノウハウ）である。それに対して本分野にとって、「言語・文学」はそれ自体が実践と理論的考察の直接的対象つまり目的となる。

2.1.1 「言語」の特性

他の学問の観点、さらに社会生活の観点からすれば、言語は自らの活動を行うための単なる手段であり、その習得は学問の予備学（準備段階）に位置づけられるが、予備学としての言語の学習と習得は本分野の重要な役割の一つ

である。しかし言語能力を磨き、言語表現の可能性をきわめることは、人間にとって本質的な欲求であり、その努力は人間精神を涵養し、より精緻で洗練された「高度」の文化を生み出す原動力となりうる。このような視点から言語を実践しまた考察することは本分野に独自の特性である。

2.1.2 「文学」の特性

文書や映像の読解・作成能力は、社会生活・職業生活のあらゆる場面、ひいては学問にとって不可欠のスキルである。リテラシーの養成は初等中等教育そして高等教育においても共通教育の根幹をなし、あらゆる学問分野で補助学として要請される。また教養の土台としても、リテラシーの涵養は教養教育の主要目標の一つである。この二重の意味でのリテラシー教育は本分野の果たすべき重要な役割である。しかしリテラシーはスキルと教養に尽きるものではない。それは実生活（社会生活・職業生活・市民生活）の課題への実際的対処、そして既存の文化・教養の受容と保存という目標を超えた人間の現実、その思いと望みを表現し理解することを可能にする能力でもある。そしてこのような観点に力点を置いて生み出される文章が狭義の芸術作品としての文学であると考えられる。この意味での文学を考察し、教授し、さらには創造することが本分野に独自のもう一つの特性である。

2.2.0 多様なアプローチ：「言語・文学」の広がり